第２期武蔵野市環境啓発施設運営会議（第４回）議事要録

日　　時　令和４年３月 29 日（火）開会 午後６時　閉会 午後８時
開催方法　Web 会議システム使用によるオンライン開催
参加者　委員８名、事務局６名
　　小澤委員長、鈴木副委員長、光田委員、宮坂委員、中西委員、村井委員、
　　新保委員、奥野委員

１　議事
　令和３年度の評価について

２　報告事項
(1)　第１回むさしのエコ・チャレンジ実施報告
(2)　環境の学校・環境の学校 Green プロジェクト実施報告
(3)　環境の学校 PR プロジェクト実施報告
(4)　気候市民会議の開催について

３　その他

委員意見・質疑及び事務局回答

発言者	要旨
１．議事　令和３年度の評価について	
事務局	資料１について説明。 令和３年度の評価について、評価の前提として、①新型コロナワクチン接種会場として活用・②自由来所スペースの活用の制約、集客事業の制約・③ワクチン接種来館者への館内展示工夫・④オンラインの活用、アウトリーチ事業の展開の４点が挙げられる。 評価の指標と手法について、施設の利用者は４月は１日平均 247 人。ゴールデンウイークからオリンピック明けの９月までは入館制限も時々あったが、緊急事態宣言後の９月からはワクチン接種会場となり、11 月中ごろまでは来館者数が落ちている。 令和３年度に実施した事業の参加者数の説明。「武蔵野トレジャーハンティング」は観光機構との協働事業で市内の謎解きイベントに参画。期間中、エコ re ゾートは接種会場になっていたので、11 月 21 日から１月 10 日まで、他施設からは独立して「謎解き」を実施した。「環境フェスタ」は、11 月６日からウェブ上で開催し、実地開催は、ポップアップイベント、コミュニティセンターでの出張ものづくり工房、また３月に行われたむさしのエコ・チャレンジと共催という形で、７組 18 名が参加した。 「ハロウィンフェスタツアー」は、若いお母さん方が吉祥寺駅周辺で行っているハロウィンのイベントで、コロナ禍のためウェブ上での開催を企画し、そのコンテンツとしてむさしのエコ re ゾートをということなので使っていただいた。２組６名が参加。 「アウトリーチ事業」は、自主学習グループからの要請で市の職

	員が講師として伺ったもので、８名が参加した。 「むさしのエコ・チャレンジ」は、環境の学校で学んだ方々の集大成の発表会を初開催したもので、環境フェスタが実地でできなかった団体・事業者の出展や、子ども向けのワークショップを開催した。 施設認知度を測るためのアンケートでは、「環境展」アンケートを掲載。来館のきっかけは、知人・友人の紹介、口コミが多かった。また興味を持った展示はやはりエコに関するもので、緑のカーテンが若干大きく、環境省のクールチョイスパネル展示などにも反応があった。環境展のイベント内容については、おおむね満足いただいた。 関心度については、三つの環境の学校の卒業生 17 名が、今後エコ re ゾートに関わりたい、サポーターとして登録してもいいという意思表示をいただいた。一定の関心度が高まり、行動の変容につながったと言えるのではないか。 満足度については、「また来たい」が圧倒的に多かったので、展示としては良かったのかなと思う。総合的な満足度についても、「満足」「大変満足」が大半を占めているので、一定の効果があったと考えている。
委員長	スタッフの方たちが非常にご努力して、出掛けて行って対応しているという印象を受けた。むさしのエコ・チャレンジに参加したが、とてもいい発表があった。 『季刊むさしの』春号に、スタッフが記事を書いてくださっているので、ぜひ見ていただければ。
委員	始まる前も、来館者数について評価してはどうかという話があった。量ではなく、質の問題だという話もあったと思うが、人数についての目標や目安はあったのか。それに対してのニーズは、どう評価されるのかを質問したい。 また、来館のきっかけが知人・友人の紹介、口コミが多いというのはエコ re ゾートらしいと思った。
委員長	エコ re ゾートの運営の評価として人数も大事だが、質を担保し、学び合いの場や啓発施設という点を大事にして、この地域のコミュニティ力を上げていくという議論があった。ワクチン接種会場になって、そういうところが数字に表れているという印象を受ける。またこういう質の担保の仕方を、みんなで議論をしていくといいと思う。
事務局	エコ re ゾートが開館したときは既にコロナ禍にあり、開館記念イベントすら縮小して行った。来客数の想定も一応はあったが、スタート時点で人の動きがない状況だったので、具体的な目標数値は実際にはなかった。ただ１日平均 200 人を超える方々に来館していただけたのは想像していたより多いと感じている。
委員	200 人は多いと思う。ましてコロナ禍の状況から考えると、こんなにもたくさんと感じる。
委員長	クリーンセンターは、受付のデザインをやっている学生さんがよく訪問しているのは見かける。以前クリーンセンターやエコマルシ

	ェと関わってもらった教え子の中には、行って工作したいという子もいて、早く感染症が収まるといいという意見も聞く。
委員	エコ・チャレンジは大変良かった。特に小学生の発表は良かった。こどもエコクラブや、小学生３人の緑のカーテンレポーターの発表など、関係者のご努力もあって非常に興味深い内容だった。小学生だと家族や知り合いが聞きに来ていたので大変盛況と感じた。 来場者については、知人の紹介というのが大きい。引き続き広い範囲で参加を促していただければと思う。
委員	来場者数について、10 月はワクチン接種会場になっていたが、３団体 445 名が来場していた。こちらは、どういう団体の方が入っているのかをお聞かせいただきたい。
事務局	廃棄物に関連する学会の方々の視察で、当初から予定されていた。四百何十人がほぼこの会議関係の学会の方々の参加である。この四百何十人は大多数がウェブで参加されており、その方々も含めた申し込みだったのでその数をそのまま載せている。 そのほか市内外からたくさんの視察関係の方々が来場し、行政関係、廃棄物関係、単純に建設系、デザイン系の先生方、学生さん等にもお越しいただいた。環境啓発に限った視察ということではなかった。
委員	スタッフの方のご努力で良い企画があり、大変困難な中で平均 200 人というのは、すごいなと今思っている。
副委員長	エコ re ゾートがワクチン接種会場になったことは、空間の自由度やその公共性を象徴的に物語っていると思う。３年度のエコ re ゾート本来の機能の評価として、人数、アクティビティについては当初の予定より低かったかもしれないが、公共施設としての機能は高く評価すべきだと思う。ワクチン接種は人と生命の関係を考え、社会の中での感染対策ということも含めて環境問題とも言える。ここで行い、実質的に効果を生み出せていることは高く評価していいと思う。
委員長	今日の議題の「令和３年度の評価について」、ご了承いただけるか。 （承認）
２．報告事項	
事務局	資料２について説明。実施結果の概要。「第１回むさしのエコ・チャレンジ」は３月５日、６日にむさしのエコ re ゾートで開催され、昨年度まではそれぞれに締めをしていた各事業を今年度は一斉に集めて行った。A「発表会」は、事業に関わった市民の方々が行った内容を発表する場。むさしのエコ・チャレンジの核となっており、５つのグループが発表した。こどもエコクラブのグループは、身の回りの自然の中での体験を発表し、独歩の森の公園に根付いた活動などを紹介した。 緑のカーテンレポーターは小学生３人の発表で、ゴーヤのカーテンの日陰のあるなしでの気温や床・ガラス温度を実際に測定して実態を把握したり、苗の成長過程で出てきた疑問を仮説を立てて調べ、その経過を写真に撮って 100 枚のレポートにして一斉に見せる

	など、とてもいい発表だった。 　環境の学校の連続講座や Green プロジェクトの連続講座の発表では、若干課題が先立ってしまったかと思う。受けた講座の内容の発表なので、インパクトのある発表はなかなか難しかったかもしれない。 　PR プロジェクトでは、高校生たちが環境問題に取り組む大人のところに聞きに行き、まとめていく中での出てきたさまざまな配慮や気付きを発表した。それぞれの発表が発表者同士の中でも非常に刺激になっていた。 　Ｂ「環境フェスタのポップアップイベント」は、ワクチン接種会場になったため開催できなくなった環境フェスタをいったん外の会場で開催し、最終時期にエコ re ゾートに戻ってきて行った。廃材のワークショップやエコのみくじを通して環境への配慮を発信した。同時に、活動している団体をゲストに招いてインターネットラジオの公開収録を行った。ネットで公開している。 　実施後、参加者がどういう視点から入って、何を見に行き、どこへつないでいけるかを仕掛けとして実験でき、体感できた。これからアウトリーチを行う場所や体験していただけるもののストックができてきたと感じている。 　Ｃ「チャレンジ提案」では、市内で活動している団体が、エコ re ゾートの館内で展示やワークショップを行った。一般の来館者が多くなかったため、手持ち無沙汰になってしまった団体さまには大変申し訳なかったが、SNS を通して来館しブースに来てくださる市民の方々もいらっしゃったので、一つの機会として実施できるという確認ができた。 　資料最後の来場者アンケートでは、出展者や発表会に登壇している方々、その関係者の方々がかなり交じっており、その中でも満足度合いが高かったので、当事者になって来られた方々にとってもいい催しだったと考えられる。 　環境に関する３つの環境に関する催しを束ねて行い、いろいろな方々に集まっていただくことで情報交流し、それぞれの刺激になっていく。毎年行っていく上で、機会として使うことができそうな感触を得たことが一つの成果であると思う。次年度以降も確認しながら進めていきたい。
委員長	資料１で示された１日の平均の参加者数より、この３月５日、６日のほうが多い。５日 425 人、６日 514 人ということで、その点が良かった。
事務局	発表会では緑のカーテンレポーターが、カーテンのあるなしの温度を測り、とてもコンパクトにまとめて発表してくれた。発表は素晴らしかったが、この子たちが特別な存在ということではなく、いろいろな気づきのきっかけを提供でき、実際に実行したことを披露することで刺激を得る機会がつくれそうだと強く感じた。
委員	今年は特殊な事情下なので、この結果は、評価というよりはベースになる。その中でアンケートは重要だと思うが、普通で 1,000 人ぐらいの方が来ていて、アンケートが取れたのが 62。もう少し取れ

	る工夫はないか。集計上は子どもと大人で１枚書いている場合もあるのかもしれないので、その辺の詳細が分かると把握しやすいかと思う。
事務局	バインダーにアンケート用紙を挟んで受付で来館者にお渡ししたが、最終数は、発表会の場にいらした方に配って書いていただいたもの。発表会以外の催しの方々にも書いてもらえるようにしておけば良かった。このアンケート内容については、発表会に関わっている方々の感覚が色濃く出てきていると見ていただけたらと思う。
委員長	こどもエコクラブの発表も素晴らしかった。武蔵野市のこどもエコクラブは 28 件ある。むさしのエコ re ゾートができてから増えてきているので、今後こういう発表をするお子さんたちも増えていくと期待をしたい。 お子さんたちのレポートしたものをこの広場で壁新聞として発表してもらうことも可能性として大きいので、回りのお子さんや学校の方たちにもいろいろと働きかけをお願いできればありがたい。
副委員長	発表は大変素晴らしかった。子どもたちもいずれ大人になると探求心が進化していく。対応できるように、例えば緑のカーテンについて、研究事例等をエコ re ゾートの施設としてストックしておくといい。
事務局	資料３、４について説明。「環境の学校連続講座」は、市内在住・在学・在勤の方を対象にした講座で、地球温暖化等のさまざまなジャンルの環境問題への理解を深め、講座で得た学びや気づきを他者に発信していく。「楽しい」「興味がある」と感じ参加したいと思ってもらえるようなテーマを考えて、地元武蔵野市に関係した講師の方をお願いした。 全５回の講座の総まとめとなる「むさしのエコ・チャレンジ発表会」に向け、受講生が自発的に取り組める仕掛け、任意で参加できる講座 Day5･5 設定した。エコ re ゾートが、見学に来た小学生を対象に行っているオリジナルプログラムを、環境の学校の受講生にも体験してもらい、楽しんでアウトプットしていくことを学んだ上で、発表に向けての打ち合わせを企画した。 発表会での発表は受講生が組み立て、前半は講座の概要を説明した。後半はこの全５回の講座の中で特に感銘を受けた Day2 の「地産地消」の講座を取り上げ、講座の中では触れていなかった武蔵野市内での野菜の収穫量や、輸送の手段による二酸化炭素排出量の違いを調べて発表した。 「環境の学校 Green プロジェクト」は、市内在住・在学・在勤の方を対象に、パンジーやイチゴの植え付けや育成などのワークショップを通して、自然の「循環」や「生物多様性」などを学び、理解を深めていく講座。草花を育成して終わりではなく、草花から関連した環境問題を知り、グループワークを取り入れた講座とした。こちらも、むさしのエコ・チャレンジに向け、受講生が自発的に発表する仕掛けを作った。 発表会では、草花やみどりをテーマに環境問題を掘り下げた発表を行った。参加者へのインタビューでは、今後学んでいきたいこと

	として、自然の環境や草花、緑化の大切性や堆肥等のテーマに偏りがあったため、来年は、広い視野で環境問題を捉えられるような組み立てにしていきたい。 　環境の学校もGreenプロジェクトも課題はあるが、どちらも10代から70代までの幅広い年代の方が参加し、年代を超え、忌憚なく、良い雰囲気で話し合う姿がよく見受けられた。今回サポーターに17名登録いただいたが、そのいい雰囲気でエコreゾートに関わってみよう、来年もチャレンジしたいと思っていただけたのかと思っている。
事務局	資料５について説明。「環境の学校PRプロジェクト」では、市内在住・在学の高校生・大学生を中心に、むさしのエコreゾートの施設、イベントの情報や環境配慮行動を広く市民に知ってもらうための活動を行った。第一期と第二期に分かれ、第一期は動画の講義、オンラインでの活動を中心に、ゲストを招いて広報・RR の基本についての知識を深めた。第二期は、その知識を生かして具体的に取材をするプログラムで、取材結果を記事にまとめてフリーペーパーにした。 　まとめとして、第一期では環境に関する幅広い話題を提供し、気になるテーマをグループで研究しまとめ、その感想を拾って SNS の投稿文章に活用するなど、広報・PR と学びを両立したような形になった。第二期では地域にフォーカスし、市内の事業者・団体の方にインタビューして環境に関する取り組みや工夫、CSR について話を伺い、記事にして環境フェスタのサイトに掲載した。 　アンケート結果より、環境の課題を多面的に捉え直し、環境について取り組む店や団体を知ることができ、大きな成果があったと思われる。一方で、対面での機会の希望や、チームでの進め方の難しさ、オンライン・実地どちらもコミュニケーションの難しさが課題として挙がった。また受講生それぞれの求める内容や、取り組みの姿勢にも違いがあることが分かったので、次年度はそこに対応するプログラムを設計し、参加対象や定員について考えていく。 　このプロジェクトを通じ、年代を超えた関わりや、取り組みの継承を促す効果が期待できるので、この仕組みをさまざまな事業に展開・応用していくことも可能と考える。一方で、インタビューする側の質問の枠や、内容、深さについては、時間をかけた学びや、プログラムを検討する必要があると考えている。
委員	Green プロジェクトにおける、パンジーやイチゴという選び方が特殊だと感じた。例えば、イチゴ栽培に堆肥が重要で、温室栽培から環境全体の話に広げると違う視点が出てくるかもしれない。パンジーもほかの雑草との関係など多角的にぶつけると、もっと面白い話が出てきたかもしれない。もう少し戦略を練るときに時間をかけたほうがいいと感じた。
委員長	対象選びはとても難しい。例えば電照菊栽培は温室の中ですごくエネルギーを使うので、何を対象にして栽培をするかによって SDGs に結び付いていく。普段購入している花屋や植物にもエネルギー消費が大きいものが多いので、そうした発想で SDGｓとの関わり、つ

	ながりをどう発想していくかというところが必要なのかと思う。
委員	以前は環境の学校に参加し、今回は環境の学校の Green プロジェクトに参加した。 Green プロジェクトでは、人間からの視点ではなく、植物の立場、パンジーやイチゴから環境を見るという点に感心した。単に植えただけではなく、土壌や循環等、基礎知識を教えていたので、幅広い観点から見ることができたと思っている。
委員長	私たちはつい桜だけを見て、その根っこのところを忘れてしまうので、今の委員のお話は大事だと思う。実を付け、花を咲かすためにも、土の中の微生物、循環が大事ということになると思う。
委員	Green プロジェクトの意見の中に、SDGs を自分ごととして捉え、大きく構えることなく、暮らしの身近なものから始めればいい等の意見が見られる。個人にできることには限界があるが、身近なできることから始めていくという精神は重要なことで、皆さんのご意見から出てきたことは非常に意義のあることだと思う。
副委員長	エコ re ゾートが自前でプロジェクトをやるのもいいが、いろいろな市民団体の活動と連携してうまく相乗りしていくと、人も集まりやすく、意義も理解されやすいと思う。
委員長	そういう意味で連携会議がある。コロナ禍で会議がうまく開けていないが、そういったところをぜひ対応したいと思う。
委員 （代読）	フリーペーパーについて、高校生と大学生にターゲットを絞ったことは、子どもと大人の間で市民参加の機会が少ない層へリーチという点で良かったが、やはりこども記者、中学生記者の取り組みもあっても良かったのかなと思う。
委員	エコ re ゾートの中のどんぐり広場には独歩の森で育てた苗木を持ってきている。せっかく今の Green プロジェクトの中で関連しているものがあるのなら、つなげて情報を出していくのは非常にいいと思う。動けるところから動いていけばいい。
委員	この１年間でスタッフ、関係者の皆さんのご努力があって充実したものを感じた。 これからは、受講生の方々の武蔵野市内での活躍が期待される。武蔵野市独自の環境ライセンスのようなものも持ってアウトリーチという形で出張できるような仕組みや、学校や保育施設などと協定を結んでいくと、単に講座を受けるだけではなくて、活躍できる場が増えていくのかなと思う。一つのアイデアとして、今後そういう活躍の展開を期待したい。 また、お子さんや家族連れの来館者数もかなり多かった。特にものづくり工房やワークショップの充実などもあって、お子さん層、子育て家庭層にかなり認知されてきたと思うので、他施設への素材提供や、むさしのエコ re ゾートを一つの大きな武蔵野市の廃材のバックヤードとすると、エコ re ゾート以外のところが小さな廃材を集めていく拠点になっていくと思う。そういう受け入れ先を募集していくと、武蔵野市全体の環境啓発にもつながっていくと思う。施設側としてもどんどん協力していきたい
委員	今は大学生、高校生ですらあまり交わらない。そういう状況でこ

	のプロジェクトが大人から高校生まで、いろいろなところで交流が実現できているのは大変素晴らしいと思う。 　私が子どもの頃は家の前が畑で、作物が育っていくのを見ていたが、今の社会では本当に少ない。パンジーやイチゴを育てるのはそれだけでも体験で、その結果を発信していく意義は大きいと思うので、今後も進めていくと良いのではないかと思う。 　小学生記者、中学生記者については、去年の末までオリンピック・パラリンピック関係の仕事を武蔵野市でやっていて、小学生記者などが取材で活躍していたので潜在力はあるだろうと感じている。方向性として考えていってよいと思っている。
委員長	「季刊むさしの」には、子どもたちが記者として体験するページがあって、しっかりとインタビューできているなといつも思っている。地域全体が「屋根のない学校」と考え、ぜひ次世代をはぐくんでいきたい。私なども発信力がないなと思っているので、今の若い方の動画を撮るスキルなども共有できたらありがたいと思う。
事務局	資料６について説明。気候市民会議と「気候危機打開武蔵野市市民活動プラン（仮称）」について、概要を説明する。 　今回、市民の方々が自分ごととして地球温暖化問題を考え、主体的に議論をする場として気候市民会議を開催する。この気候市民会議の議論を踏まえ、市民一人一人の環境配慮行動を示す、「気候危機打開武蔵野市民活動プラン（仮称）」を作成するとともに、市民の皆さんの意見を参考に市は市民一人一人の行動を支援し、市民と市が協働して地球温暖化対策に取り組んでいく機運の醸成が目的である。 　気候市民会議は、無作為抽出で選ばれた市民によって、気候危機問題、地球温暖化問題について話し合うもので、フランスやイギリス等では既に行われ始めている。日本では、札幌市や川崎市が先進的に行っているが、まだ事例は少ない。 　参加者は、無作為抽出と公募による、市民の方々40 名程度と考えている。無作為抽出とはいわゆるくじ引きで、抽出された市民の方々にお知らせをして、ご応募をいただく。公募は、該当する方であれば、どなたでも自由に参加いただけるということになる。 　会議は５回を予定。各回に環境問題の現状についてのレクチャーがある。その後にグループごとに分かれて、レクチャー内容を踏まえ、それぞれのテーマについて話し合う。気候変動対策等について市民目線で議論を行い、それぞれのグループごとに発表することを想定している。 　４月にまず参加者募集を行い、無作為抽出、公募の方々40 名程度を選定する。最終的には５回の会議終了後、「気候危機打開武蔵野市民活動プラン（仮称）」を作成予定。 　気候市民会議、プランの作成は、武蔵野市の環境部環境政策課の計画係と環境啓発施設係が共同で行う。
事務局	ワクチンの接種会場としての期限は、まだ確定はしていない。動向を見ながらになる。今３回目の接種が始まっているので、当初から予定している施設の貸出を、終息に合わせて進めていきたいと思

	っている。施設利用の登録団体の方の申し込みなども併せて開始をしていきたい。動向が決まったら、委員の皆さまにもお知らせをしていきたい。
委員	今各コミニティセンターなど、新型コロナで人が集まれない。だが、ふるさと歴史館のコンテンツをみんなで見ようとか、コミセンによっては環境を整えて、ディスプレイを見ようというところが出てきている。今年作ったコンテンツや映像をぜひ売り込んで、配信していくように考えていただければと思う。
３．その他	
事務局	人事異動の報告。